

BATTLE GREEN15

先月号で移民の急増によるレキシントン町のコミュニティ意識の解離について触れたが、幸いなことに町の中心人物たちは現時点ではさほど悲観的にはとらえていないようである。

町議会議員(Town Meeting Member)のレイシーにボランティア人口の減少について尋ねたところ、「レキシントン町は他の町よりもまし」とまったく気にしていない。この町にはいくつもの委員会の委員をこなしている彼のような「ボランティア常連」が二、三千人いて「人口約三万人の町でこの割合は多い」のだそうだ。「この町には自分の信念を押しつけた者が多いから、少なくとも町議会議員については、これからも立候補者にはことかかないだろう」と彼は笑う。

移民が旧住民の常識を尊重しないことについても、ボランティア常連の多くは、移民をひとくくりにして問題視する旧住民のほうにも非があると考えている。彼らは、「何世代も前からこの地に住んでいるから自動的に新住民よりも発言権がある」という発想そのものが間違っていると考える。出身地やこの地に住む長さにかかわらず、町民全員に同等の権利がある。それは「町のアイデンティティ」についても同様だ。住民が「町の理念」を作り、それに惹かれて集まった者がアイデンティティを築き上げ、維持する。それがレキシントン流の民主主義だと彼らは信じている。

教育委員(School Committee Members)の顔ぶれを見れば、彼らの信念を支持する住民が多いの

もあきらかである。私の隣人のサクージヤはインド出身で、委員会の長の務めるのは、父親がキューバからの移民で、保守的なインディアナ州で生まれ育ったヒスパニック系のディアスである。

私は、ディアスが教育委員に就任したばかりのところ、その動機について尋ねたことがある。

教育委員は、公立学校で問題が発生したら町民からの非難が集中する心労の多い立場だ。それなのに選挙費用を自己負担してまで町に奉仕する理由は何なのだろう。ディアスは、謙遜や婉曲的な表現はまったく試みず、率直にこう答えた。

「教育委員は、人々から尊敬される、政治的な地位です。この仕事についているのは、たいてい政治に興味を抱いている者なので、よ。嫌な思いをすることはあまりありません。報われる仕事です」

彼は、「ほかの州に住んだことがない人にはわかりにくいかもしれませんが……」と前置きして、マサチューセッツ州の特別さを説明してくれた。

アメリカ合衆国の他の州の地方自治体では、住民は愚痴は言っても直接政治に関わろうとはせず、政府任せにしている。それに比べ、マサチューセッツ州の住民は、歴史的背景のせいか、行政のプロセスに自分たちが参加するのは当然の権利だと信じている。ことにレキシントン町の住民はその意志が強いので、自分たちが直接選べる無給の代表(つまり五人の行政委員と五人の教育委員)にプ

口の公務員(タウンマネジャーと教育長)よりも強い権力を与えて

バトルグリーン/連載エッセイ15

渡辺 由佳里

コミュニティをつなぎとめる人たち



「アメリカの公立学校というのは『手に職をつける(vocational)』ためではなく、民主主義を遂行できる市民を育てるために作られたというのを知っていますか？」

ディアスが崇拜するサム(サミュエル・アダムス)は、日本人にはラガービールとして知られているだけだが、英国の植民地課税政策に反対して「ボストン茶会事件」を首謀し、のちにマサチューセッツ州知事になった建国の英雄である。アダムスが、「公教育(公立学校での教育)」をすべての市民に与えたいと願い、マサチューセッツ州の憲法にもそれを記した理由は、市民が民主主義を遂行するために教育が不可欠だと信じ

るのだから。

また、アメリカの地方自治体にとつてもっとも重要な公共施設は公立学校である。

「アメリカのどの地を訪れても、必ず同じ答えが戻ってきます。たとえ公立学校にどんなに不満を覚えていても、この答えは変わりません」

地方自治体にとってそれほど重要な公立学校の方針を決める地位が、教育委員なのである。イギリスという権力に反抗して立ち上がった祖先を誇るレキシントン町の住民がディアスに与えた信頼の大きさは、ビジネスで成功して早期に引退した彼にとつて、それと同等かそれ以上に輝かしい人生での達成なのだ。

ディアスは、アメリカの公立学校に対する私の見方を根本的に変えるこんな話をしてくれた。

私はレキシントン公立学校の教育理念を反映する素敵な高校生たちに出会った。

私はレキシントン公立学校の教育理念を反映する素敵な高校生たちに出会った。

「知識が普及し、徳が順守されれば、誰も従順に自由を引き渡したり、簡単に抑制されたりはしないだろう」とアダムスは論じた。

二ユーイングランド地方、特にマサチューセッツ州が残りのアメリカと異なるのは、現在でもアダムスの理想を維持し、「民主主義のプロセス」を重視することだとディアスは考えている。だからこそ彼は、公立学校の義務は、読み書きのみならず「民主主義のプロセス」を子供たちに教えることだと信じている。

このような教育委員たちに導かれていたからこそ、レキシントン公立学校は小学校から政治について学ぶ機会を多く与える。たとえば、大統領選挙のときには小学校から高校まで年齢に応じたレベルで情報収集と生徒間デイベート、模擬選挙などが行われる。それは、アダムスが論じたように、公教育でもっとも大切な民主主義のプロセスを教えるためであり、子供たちに社会に貢献するための技能を身につけさせるためでもあるのだ。

「知識が普及し、徳が順守されれば、誰も従順に自由を引き渡したり、簡単に抑制されたりはしないだろう」とアダムスは論じた。

二ユーイングランド地方、特にマサチューセッツ州が残りのアメリカと異なるのは、現在でもアダムスの理想を維持し、「民主主義のプロセス」を重視することだとディアスは考えている。だからこそ彼は、公立学校の義務は、読み書きのみならず「民主主義のプロセス」を子供たちに教えることだと信じている。

このような教育委員たちに導かれていたからこそ、レキシントン公立学校は小学校から政治について学ぶ機会を多く与える。たとえば、大統領選挙のときには小学校から高校まで年齢に応じたレベルで情報収集と生徒間デイベート、模擬選挙などが行われる。それは、アダムスが論じたように、公教育でもっとも大切な民主主義のプロセスを教えるためであり、子供たちに社会に貢献するための技能を身につけさせるためでもあるのだ。

★プロフィール★

わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

<著者のブログ>
http://watanabeyukari.weblogs.jp/